

オックスフォード大学でゼミを開いてきました

(於：イギリス、オックスフォード)

日本大学・日本女子大学・昭和女子大学 非常勤講師

シム チュン キャット

2006 年度奨学生

去年の年末に、スカイプでシンガポールの友人達に「今度の 2 月にオックスフォードで Seminar を開くんだ」と話したら、「えっ？今度の 2 月にオックスフォードホテルで Seminar を開くんだって？」(注：オックスフォードホテルはシンガポールの都心にあるアクセス抜群のホテルの一つです) とか、「えっ？今度の 2 月にオックスフォードテラーで Semi-suit を作るんだって？」(注：オックスフォードテラーは僕もその昔公務員だった頃によくシャツやらスーツやらをテラーメイドで注文した、都心にあるテラーの店名です) と彼らはボケつつ、最後まで僕があのおックスフォード大学でゼミを開くことになっていたことを認めようとしませんでした。それくらい、オックスフォード大学、それからケンブリッジ大学は、僕のような輩が簡単にゼミを開けるほど普通の大学では全然ないと多くのシンガポール友人は思っているのです。実際に、シンガポールの進学高校にはこの両大学への直接入学を目指す「オックスブリッジ・コース」という特別進学コースが僕が高校生だった頃から、そして今でも健在です。シンガポールの初代首相で「建国の父」とされるリー・クアンユー氏がケンブリッジ大学を首席で卒業した話も広く知られ、その偉業は若いシンガポール人に「Boys (and Girls) Be Ambitious!」以上

のメッセージを暗黙に送り続けてきました。



シンガポールが独立を獲得した 1965 年まで実質 150 年近くシンガポールを植民地として統治していたイギリスは、昔から僕には遠くて近い国です。港の近くにはイギリス式の古い建築物や記念碑が多く立っているし、シンガポールを「発見」したラッフルズ卿の名前もホテルの名前から学校や病院の名前まで、あらゆる分野において「ブランド物」の代名詞になっています。色は Colour、中心は Centre、サッカーは Football、アパートは Flat、エレベーターは Lift であり、また「私はできない」という表現も英語で「アイ・ケンツ」ではなく「アイ・カンツ」と学校で習いました。中高生だった頃、生意気にもよく友人達といろいろなホテルの午後のハイ・ティーを楽しむにも行きました。「イギリスかぶれ」という言葉が軽く聞こえるほど、多くのシンガポール人にとってイギリスは非常に特別

な国なのです。とにもかくにも、こんな僕がオックスフォード大学でゼミができるなんて、夢にも思いませんでした。すべては僕の恩師であり、今ではオックスフォード大学の教授になられている荻谷剛彦先生のお計らいと、渡英のための旅費を援助していただいた渥美国際交流財団のサポートのお陰です。この場を借りて心からお礼を申し上げたいと思います。



さて、ということで僕はほぼ 20 年ぶりにイギリス入りし、そして 2 月 9 日（木）にオックスフォード大学で 90 分だけのゼミを開いてきました。講演の題名は「Issues & Challenges of Single & Multi Track Education Systems in the 21st Century」（21 世紀における単線型と複線型教育制度の課題と挑戦）でした。僕の講演が行われた St Anthony's College は、冬休みの間中、毎週の木曜日に外国から招いた各分野の若手研究者に公開ゼミをやってもらうそうです。自由参加な公開ゼミであるため、参加者の専門分野も社会学から政治学、経済学、宗教学や軍事学までまちまちでしたが、共通するのは「アジア」に対する研究関心でした。研究畑が異なるにもかかわらず、僕のプレゼンテーションが終わった後の 45 分間の質疑時間には、僕が日本の大学で経験したことのない活気がありました。

しかしそれでも足りないらしく、その後もコーヒールームで二人のイギリス人学生、ノルウェー人学生ひとり、日本人学生がひとりともう一人のシンガポール人学生と 2 時間近く雑談を交え、話題は教育からアジアの宗教や政治情勢まで広範囲に及びました。声が嘎れるくらい疲れましたが、オックスフォード大学にまつわる面白い話や学生たちの世間話も聞くことができ、そのうえ好きなイギリス英語をずっと耳にできる自分はとても幸せでした。さらに、その後荻谷先生にご招待いただいた大学のハイデールブルディナーの席でもまた違う分野の研究者と話すことになり、南米における女性政治家の歩みや同じ独裁国家でもリビアとシリアへの対応の違いの理由など、普段まったく縁のない研究領域についての話も、美味しい料理とワインとともに吸収することができました。

ゼミが終わった翌日から、落ち着いたオックスフォードの町とその近郊をぶらぶらと探索したり、歴史感たっぷりの教会と博物館を巡ってタイムスリップ気分を味わったり、ずっしりとした石造りの図書館で 800 年以上のアカデミックな空気に浸ったりした時間が今思い出しても心が躍り、そして何より毎晩先生と友人と一緒に足を運んだパブで飲んだ地ビールとギネスがこの上なくグッドテイストでした！